

【佳作】

響け

山本芽依（北海道 喜茂別町立喜茂別中学校 3年生）

プロローグ

「お前『ゆり姫』なのか？」そう私、月島ゆり子に言い放ったのは、この学校という国の中で一番のイケメンと噂されている近松圭祐だった。

彼は、この国のキャラ設定では、チャラ男に分類される人だ。

ゆえに私のような、超地味で、おとなしい系女子というレッテルをまとった者には、縁もない人物だった。

『ゆり姫』とは、私の本当の名前だ。

いや、違う。厳密には、本当の自分を表すための、名前だ。

『ラピスラズリ』通称、『ラピラズ』と呼ばれる、歌い手サイトで、私は『ゆり姫』と名乗って活動している。

なぜ彼は、私のことを知っている？そのことで頭がいっぱいだった。このことがばれたら、絶対クラス全員から冷めた目を向けられる。

そして、ラピラズを興味感覚で調べた男子が「こいつの声ヤバすぎ」と、発信した瞬間から全世界に拡散される恐ろしいサイトに投稿され私は、ラピラズからもこのクラスからも居場所がなくなるんだ。

そんなの嫌だ。そうやって意識を保つので精いっぱいだった。

嫌な記憶がよみがえる。うっかり聞いてしまったあの瞬間を。

「ゆりちゃんも声って変だよねー」世間話の流れからなぜそうなる…その瞬間から、毎日が地獄だった。

我ながら、ずっと明るく対応していたと思う。感情を押し殺して。

私の声は、世界でいうダミ声だ。「おい、いい加減うつむいていないで答えろ」近松さんが声を荒らげて言ってきた。

何も言えない。言えるわけがない。

（そうだ、これは夢なんだ）

ちよっと天才かもしれない。その刹那、思いっきり自分の頬を叩いた。

乾いた音が響く。だが、頬がひりひりと痛みが走った。

「はっ？お前何してんだよ!!」

——目を開けるとそこには心配そうに見つめる近松圭祐の顔があった。

第一章

ゆり子がラピラズでの配信を始めたのは真新しい制服に身を包んだ頃だった。高校という国に入ってから毎日苦痛だった。

クラス中で、派閥ができて始めそれぞれがこのクラスになじんでいくため、自分を押し殺してまで女王様に仕え始めたのだった。

あそこには、エセ天然らしき人物。

何がいいんだか……

そう思っても益々浮いてしまうため仕方なくおとなしい女子を演じてみる。

(あ—————)

こんなの違う。

ここまで現実とは違うのかそう嘆いてみるが誰も心配しない。まず、友達なんていないのだから。

だったら、やってやろうじやない。

この声で歌ってやるよと思った。歌うことはもともと好きだったが、あの事件のせいですと歌うのが怖かった。

でも……

『どんなに馬鹿にされても、前を向きつづけて』

そう教えてくれたのは、今はもう、亡くなってしまった大好きな母だった。

これを生きるモットーとすると母の最期に誓ったのだ。だから、出来ないって思われていても、怖くても、やり遂げるんだ。これが本当の月島ゆり子なのだ。

第二章

俺の名前は、近松圭祐。

この学校では、いわゆるチャラ男に分類される。

自分で言うのは何だが、俺は周りの奴から信用されている。きつと……。

だが、俺には秘密がある。

着信音の後、パソコンの画面が光る。表示すると一通のメールが届いていた。

『こんばんは。突然すみません。私は、ゆり姫というラピラズでの歌い手です。突然なのですが私が私に楽曲を作ってくれませんか？お返事待ってます』

なんだ、こいつ。ゆり姫って名前変だなあ。

だが、皮肉の笑みを浮かべる。すっと目を向けると、「ちかまつー」という文字が目につく。

人のこと言えねー。

俺が登録しているのは、『ダイヤモンド』通称『ダイヤ』という楽曲制作専門のサイトだ。そうだ。俺は、柄にもなくメルヘンチックな曲を作ってみたりしているのだ。

「ふう」と息をつく。もしもこれがばれたら俺はどうなるのだろうか。みんなの信頼はいつたいどこに行ってしまうのだろうか。

何となくゆり姫に返信を書く。

『ゆり姫さんこんばんは、ちかまつーです。楽曲の依頼ありがとうございました。是非お願いします』

エンターキーを思いっきり叩く。

「はあ」また、ため息をついてしまう。

何度も何度もやめようとした。だが、こんなにも楽しい事、辞められるわけがない。

五分もたたないうちにすぐに返信が来る。

『ちかまつーさん。ありがとうございます。こんなにも素敵な楽曲を作るひと初めて見ました。何卒よろしくお願いします。失礼承知で、勝手にコラボさせてもらいました。よかつたら聴いてください』

「ん？」不思議な人だ。こんなにも丁寧な文面なのに行動に移すのが早い。

まあ、たじたじされても困るのはこっちだからな、そう思いありがたく聴かせてもらう。

この前奏……「国の生贄」だ。

俺が初めて、ダイヤで作った楽曲だ。

激しいテンポで兵士の感情をイメージした楽曲なのに……

そんなことを考えていると、透き通った歌声でありながらも意志のあるフレーズが脳内に響いた。

「キャラクターなんてぶち壊してやれ」

この人……すごい。ただただ、それしかいうことができなかった。放したくない。

不意に初対面の相手にこう思ってしまった。

俺は、彼女の歌声に恋をしたのかも知れない。生まれて初めての本気の恋を。

第三章

(ふっふふー。ついに送ってしまった……)

そう思いながら私、月島ゆり子兼ゆり姫が音楽室へと向かう廊下を浮足で歩く。

ちかまつつーさんとのメールのやり取りをしてから早一週間。毎日、夜が天国すぎる。

曲のイメージを膨らませるだけで楽しいのだ。

すると、音楽室から「国の生贄」の前奏が聞こえてきた。

ピアノが私を呼んでいる。

浮かれた気分になっていた私が馬鹿だった。

前奏が終わわり、「キャラクターなんてぶち壊してやれ」と素の声で音楽室に飛び込んだ。

気持ちが良い上がる。誰もいない音楽室から「国の生贄」が聞こえてくるなんて

……えっ「誰もいない音楽室から？」

背筋が凍るとはこのことか。

今年一番の非常事態なのに、なんと阿保らしいことを考えてい

るのだろう。

ロボットのようになり、首を動かす。

目の前には、目を真ん丸にした、近松圭祐がいた。

「はっ？お前何でこの歌知ってる？」

「あっ……いやっ……」

何も言えない。日本語もろくに話せない状況だ。途端に、目が

合わせられなくなり俯く。

「おい、お前無視かよ」

(いやいや、無視なんてしませんから！)

かろうじて、喋っていましたからね……。

「はあ」ため息を吐かれる。

「黙りっここかよ。めんどくせー」

(ヤバイヤバイ！これ絶対怒ってる。)

「おい、どっち向いてるんだよ」

突如、イケボが耳元に響く。

(ヤバイ！)

そう思ったのも束の間、強引に頸を掴まれる。

動揺と、混乱に見舞われる。

必死に、逃げようとするが、男子と女子との力の差がそり立つ。

「何、逃げようとするんだよ」

(うわああああ)今日が私の命日です……

「で、てめえなんで、俺たちが作った歌を知ってるんだよ」

(えっ……俺たち?)

これは、私が、ちかまつつーさんと勝手にコラボしてできた歌だ。

「サイトにアップロードしてねーはずなのに」

(まさか……)

冷や汗が垂れる。

「お前、ゆり姫なのか。」

(どえええええ)

ぱっと顎が解放され、ようやく理解する。

近松圭祐はちかまつーさんだったのだ。

「おい、いい加減答えろ」

何も答えない私にだんだん腹が立ったのか、声を荒らげて言ってきた。

何も言えない。「はい。そうです。」なんて言えるわけがない。

(そうだ、これは夢なんだ)

思いつき自分の頬を叩いた。

乾いた音が響く。だが、頬にひりひりと痛みが走った。

「はっ？お前何してんだよ!!」

——目を開けるとそこには心配そうに見つめる近松圭祐の顔があった。

あーこの人意外と優しいな。

変なことを考えていたら、こっちに向かってくる大量の足音が聞こえてきた。

頬が真っ赤な女子生徒と、学校一のイケメン。

(……このシーン誰かに見られたら、絶対に勘違いされる!!)

その考えは、あっちも同じだったらしい。

怪訝そうな顔をして、近づいてくる。

足に根っこが生えているみたいだ。不意に腕を掴まれる。

(はっ!!)

「雰囲気読めよな」呆れた表情で笑いかけてくる。(笑えないからああ……)

その刹那、顔面に風を感じる。後ろに「誰あの子」と女子が喚

いている声がする。

「ちょっと待ってください!」

訴えても止まる気配がない。

「んあ?なんだよ、てかお前喋れるんだな」

「えっとー」やはり挙動不審になる。

「なあんだよ」

「いやあ:あのお……廊下走ったらだめですよ」

急ブレーキがかかる。勢い余って彼の背中に激突する。

「いったあ:」また素の声を出してしまった。

(またやつちまった……)

「がははは」と大声で彼に笑われる。

「いや、まさか走っていること言うとは思わなかったわ」

(いやああ 何も言えねえええ)

まるで、某有名プロ競泳選手だ。

「で、お前ゆり姫なんだろ?」

硬直する。ばれたら、言いふらされる。

何も言えずにうろたえていると、優しく問いかけてくる。「そうだろ?」と。ずっと見つめ続ける。

(ああ、無理だわ、これ)

何も言わず、首を縦に細かく振ってみる。

「やっぱり……」彼は、静かに納得する。

ああ、終わった、楽しい時間だったな。

「意外だったな」と一言。

「あの……楽曲作りますか?」声を震わせながら聞いてみる。

「は?んなわけないだろ」

「へ?」思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「何を言ってる?やるに決まっているだろう」と、自信満々で返

事をする。

思わず、俯きながら自分の喉に触れる。それを見ていたのか、「ほかの奴は、知らんが俺は気にならん。むしろ、俺は好きだ」(すすすすきいいいい!!)

「勘違いすんな、俺が好きなのはゆり姫の声だ。」
 「あつれー?バレてる」
 「ゆり姫の感情って顔にすぐ出んな」
 「なにっ!!」焦って顔を手で覆い隠す。

ほらそういうとこだつて、とまた笑われてしまった。
 【キーンコーンカーンコーン】

「あつ……やばっ」

二人の声が重なる。彼と目が合いお互い笑い合う。
 さっきまで、ろくに話せなかったのにな。

第四章

私、月島ゆり子こと、ゆり姫と近松圭祐こと、ちかまつっーさんは順調に、一つの歌を作り上げていった。ちよつとずつ過去を話しながら。

ちかまつっーさんといると楽しい。学校が楽しいと思えるのは、何年ぶりだろうか。ちかまつっーさんと会えるそう思うと胸が高鳴るのだ。

(今日は会えるかなあ)なぜか、あの音楽室に来てしまった。

彼のことを考えていると、後ろから冷たいものが頬にくっついた。

「うぎゃっ」とかわいげのない声で叫んで後ろを見ると、まぶしいくらいに微笑んだちかまつっーさんがいた。

「今日もあつちで」その一言を言ってから缶ジュース置いて行っ

てしまった。

少しだけさみしい気持ちにはなったが、首を思いつきり振ってこの気持ちをかき消す。

「やっと完成した」

二人のボイスチャットが重なり合う。

順調にはできていたが、やはり時間がかかった。
 ふと、カレンダーを見ると学校祭の文字が見えた。

学校祭当日

俺、近松圭祐こと、ちかまつっーはあることを考えていた。その名も、

「ゆり姫と一緒に作った曲を学校祭でお披露目したいっ!」だ。
 (いや、こんなことをしたら俺の前から消えてしまうのでは…)

だが俺には、もう一つの計画があった。

これこそ、本当に言ったら完璧フリーズされてしまう。

ずっと過ごして来たからこそ分かったことがある。彼女は男性と顔をみて話すことができない。

この前、一緒に某有名ファミレスに行った時もイケメン店員に「お水です」と言われただけで、硬直していた。うん。それはそれでかわいかった。

ついに来た。

有志発表と呼ばれる、個人が、ある事柄について発表するときが。

参加者の発表が始まり、校内の雰囲気が高揚する。
 だか、俺はそんなもの見向きもしない。

俺は、ゆり姫を探していた。本当の気持ちを伝えるために。

やっと見つけた。相変わらず一人で静かに有志発表のバンドの演奏を聞いていた。

「あつ！ ちかまつーさんじゃないですか」

俺を見つめ、元氣よく手をブンブン振っている。

あーこういうのがかわいいんだよなあ。

「やあ」一言だけ言う。そして、何も言わずに彼女の手を引く。

彼女の細すぎるくらいの腕に驚いた。

何とか、ステージ袖まで来た。

「ちかまつーさん!」と彼女はかなり驚いているようだ。

マイクを渡す。彼女は、きつと理解している。

「ゆり姫のキャラはそんなんじゃない」そういうと、俯く。だが、ありのままの彼女のほうが絶対いい。

だが、「行くぞ」と、共に彼女とステージに出ていく。

幕が上がる。スポットライトが俺たちをまばゆく照らし出す。

「何あの子」と悲鳴にも似た女子の声がある。

かかってきたのは、俺とゆり姫とで完成させた曲、「偽りの自分」だった。「怖がるな、声震えてみつもまないぞ」と笑いかけてみる。「何ですかあ」と声にならない叫びで俺に訴えるこの曲は、俺の一言から始まる。

『自分を殺してるんだろ』

はつきりとした低音ボイスが、冷え切った会場に響く。「ゆり姫、何があっても俺が守るから」と小声で喋りかける。「まさか、できないのか?」と試すように言ってみる。

『偽っているんだ自分自身を』と本当の声で歌う。

この曲は、月島ゆり子の気持ちをダイレクトに表した曲なのだから。

響け

自分自身を、偽って過ごしているみんなに。

響け

つらいなら辞めてしまえ、と。

『一步踏み出す、それが明日への扉なのだから』

終わった瞬間思いがけないことが起きた。

たくさんの拍手とたくさんの歓声が私たちに向けられたのだ。た。

思わず感極まる。だがまだ俺は、大切なことを言っていない。今となりにいるゆり姫、ではなく月島ゆり子に、だ。

深呼吸をしながら、彼女を横目で見ると今にも泣きだしそうな目でこちらを向いていた。

彼女と視線を合わせる。

「俺は、月島ゆり子が好きだ」と、どストレートに思いを伝える。

ただでさえ大きな目が一層大きく見えた。

彼女は、俺に初めて見せる大人な笑顔で、「私も、近松圭祐さんが大好きです」と、一筋の涙を流しながら言った。

俺たちは、制作パートナーではなく、永遠のパートナーとして道を歩み始めたのだった。

どんな困難にあっても、俺はゆり子のことを守り続ける。と、ひそかにステージの上で誓ったのだった。